

# 「GIRI GIRI」

—初稿—

2026/5/3

雨森 れに

〈人物表〉

今野 茉白 こんの ましろ

(13)

中1。剣道経験者の剣道部員

立石 彩華 たていし いろは

(14)

中2。剣道部員。全国大会優勝者

友人A

(13)

友人B

(13)

1. 中学校・道場（夕）

一般的な剣道稽古場。部活動の時間である。  
今野茱白（13）と立石彩華（14）が打ち合う。  
激しい竹刀の音。  
攻防の中で彩華の剣先が茱白の面金前を通過する。  
審判をする顧問、一瞬反応。  
茱白、視界が遮られたことで、顔を傾ける。  
彩華、その瞬間に面を決める。

2. 中学校・昇降口（夕）

靴箱には、まばらに靴が残っている。  
トロフィーを飾る棚があり、剣道トロフィーのリポ  
ンに『令和6年度個人戦優勝 立石彩華』と書いて  
ある。

3. 中学校・廊下（夕）

茱白、制服姿で友人数名と歩いている。

茱白 「彩華先輩マジで強い。勝てる気がしないんだけど」

友人A 「ええ。だってあれはさあ」

友人A、友人Bと目を合わせる。

友人B 「だよー」

友人A 「反則ギリギリ、じゃん？」

茱白、顔をしかめる。

茱白 「あれは流れじゃん。たまたま剣先が——」

友人B、話を遮って、

友人B 「昨日も一昨日も同じこと言ってるし。『たまたま』って」

友人A 「うちらから見たら、たまたまじゃないんだよ」

友人B 「狙ってるよね」

茱白 「毎回ギリギリ、なんて狙えないと思うけど」

友人AとB、足を止める。

茱白、ふたりと向き合う形で立ち止まる。

友人A 「マジで言ってる？」

友人B 「じゃあ、狙えてたら茱白はどうすんの」

茱白、無表情。

4. 公園・内(夜)

住宅街にある小さな公園。

彩華、よれたTシャツ姿で素振りをしている。

彩華 「299……300ッ」

彩華、竹刀を下ろす。

肩で息をしつつ、汗を拭く。

竹刀を構えなおす。

面・小手・胴をすべてガードする、三所隠し状態。

即反則になるガードである。

5. 公園・外(夜)

公園の外側。住宅街の路地。

茱白、竹刀袋を背負っている。

公園に入ろうとし、彩華の存在に気づく。

彩華は竹刀を細かく動かしている。

茱白、眉をひそめる。

6. 公園・内(夜)

茱白 「彩華先輩、お疲れ様です」

彩華、茱白に驚く。

彩華 「お疲れ様。家、この辺だっけ」

茱白 「はい。先輩も？」

彩華 「うん。登下校、一緒にならないよね」

茱白 「私、いつも寝坊してるし、帰りは買い食いしてるんで。

あ、買い食いは内緒ですよ」

茱白、恥ずかしそうに笑う。

彩華、つられて微笑む。

彩華 「どうりで。朝練、ギリギリなわけだ」

茱白、ギリギリという言葉に表情が強張る。

彩華 「あ、ごめん。今のは嫌味とかじゃないよ」

茱白、覚悟を決めたような、まっすぐな視線。

茱白 「さっきの、なんの練習だったんですか」

次は彩華の顔が強張る。

茱白 「面・小手・胴を隠してました。三所隠しは即反則じゃないんですか」

彩華 「違うよ。中心を奪い合ったときのイメトレだよ」

茱白 「三所隠しを誤魔化すときにやる動きにも見えませんでした」

彩華、タオルで汗を拭う。

茱白を睨んで、

彩華 「てか。それ、先輩に言うことなのかな」

茱白、怯む。

茱白 「わ、私はいつも正々堂々と戦ってますし」

彩華 「まるで私が正々堂々としていないみたいだね」

ふたりは見つめ合う。

彩華はよれよれのTシャツ姿。

茱白はスポーツブランドのジャージを着ている。

彩華、鼻で笑う。

茱白 「なんですか」

彩華 「なんでもないよ。ね、一戦しよ?」

茱白 「でも、防具とかないから……」

彩華 「じゃあ打ち合いだけ。トドメはなし」

茱白、少し悩んで、

茱白 「正々堂々でお願いします」

× × ×

地面に長方形が書かれ、その中にふたりがいる。

竹刀と竹刀が当たる音。

押し合い。茱白のほうが力強い。

彩華、押し合いに負けそうになる。

茱白、離れる。

ふたりは間合いを取る。

彩華 「押し出さないんだね」

茱白 「力で押し出すのは反則ですよ」

彩華、カチンときたように間合いを詰める。

続いて竹刀と竹刀がかち合う。

彩華の打ち込みに耐える茱白。

茱白、もうだめかもしれないという表情。

彩華、にやりと笑う。

彩華 「戦う意思を見せないのも反則だよ！」

更に勢いを増す。が、地面の窪みにバランスを崩す。その瞬間、茱白が彩華の後ろに回る。

茱白、彩華の背中に竹刀を当てる。

息も絶え絶えで、

茱白 「試合なら、胴で、決まっています」

彩華、そのままの体勢で荒い息をしている。

茱白、竹刀を下ろす。

茱白 「今のはラッキーでした。いつもなら私は勝てないんです」

彩華、観念したように、

彩華 「降参。いつもは、反則にならないようにしながら、ギリ

ギリ勝ってるだけ」

茱白 「それ、実力なきやできませんよ」

彩華 「実力、実力かあ。ただ、負けられないだけなんだよね」

彩華、その場に座る。

彩華 「うちの家、余裕なくてさ。せめて、負けなのがステー

タスみたいなの」

茱白 「負けたらやめなきやなんですか？」

彩華、首を振る。

茱白 「じゃあ正々堂々でいいじゃないですか」

彩華 「ムキになってたの。だって、茱白ちゃん強いんだもん」

彩華、申し訳なきげに微笑む。

茱白 「ギリギリでも、先輩は私の目標なんです」

茱白、彩華の目の前にしゃがむ。

茱白 「次は団体戦で全国いきましようよ」

彩華 「正々堂々だけじゃ全国は狙えないよ」

彩華の竹刀が茱白に向く。

茱白、剣先を握る。

茱白 「なら、教えてください」

## 7. 今野宅・外観(朝)

住宅街にある大きな家。

彩華、玄関で待っている。

茱白、眠そうに出てくる。

8. 道(朝)

通学路。

茱白と彩華、談笑。時折竹刀を構えるフリ。それを目撃する友人AとB。不思議そうな顔。

9. 中学校・道場(朝)

朝のひんやりとした空気。

茱白、面金を着ける。

竹刀を持ち、進み出る。

対戦相手は彩華。

ふたりの竹刀がぶつかる。

彩華 「絶対手加減しないで」

茱白 「はい」

激しい攻防。

彩華、三所隠しに入ろうとし、やめる。

茱白、力で押し出しそうになり、距離を取る。

間合いを取り合い、再度攻防が始まる。

白熱する戦いに、周囲も前のめり。

茱白の打ち込んだ剣先が彩華の面金前を過ぎる。

審判、一瞬反応するが止めない。

彩華が顔を傾ける。

茱白、面を狙って竹刀を振り下ろす。

大きく響く一閃。

彩華、面を入れられる前に胴を決める。

ふたりは下がり、一礼。

茱白・彩華 「ありがとうございました！」

壁際にはける。

茱白、面金を取る。

満ち足りた表情。

彩華も同じ表情をしている。

ふたりは笑みを交わす。

竹刀の音の中、ふたりの拳が重なる。